

バッヂに寄せるユーゴスラビアへの思い

森みね子

小坂町立国民健康保険病院・助産婦（岐阜県）

8年振りのバッヂ

年の瀬に小抽出しを整理していると、懐かしいバッヂがみつかりました。大きさ1.5センチ平方の四角い銅製のもので、表側は、青、白、赤に、縦に3段の色分けがされています。白の部分には赤い星が、赤の部分にはアルファベットの大文字の人名「BRUZE TITO」。その下に3段の小文字の列、意味は不明。裏側には止め針がついている。このバッヂはユーゴスラビア人のチトー大統領を敬愛する証の1つだと思われます。

ユーゴスラビアとチトー大統領

今なぜユーゴスラビアが気になるのか。言うまでもなく、未だに絶えざる忌まわしい民族紛争が、いやというほど毎日の新聞やテレビを賑わせているからです。この原因は何なのか。複雑な民族が接合する土地柄から、種族や宗教の違う人間が交錯することで生ずる行き違いの数々が元になっていることは当然であろうと思われます。そのうえ、国境を接する国が7か国にも及ぶという条件が国情を一層複雑にしているのです。日本人にはとても理解し難い状況なのです。

チトー大統領は、そんな国を連邦人民共和制とし、1953年以来自ら大統領として社会主義政策を進めました。1980年に故人となりましたが、今でも種々の蟠りを越えてユーゴスラビア人の心の中に生きるすぐれた政治家なのです。

彼が活躍していた当時の世界には、カリスマ性のある政治家が共存しており、お互いに深い友情

で結ばれていたと言います。名を挙げると、ネルー、チトー、スカルノ、ケネディの4人。いずれも世界史上に輝やく人々であり、自国ではヒーロー的存在なのです。中でもチトー大統領が亡くなった当時のユーゴスラビアの悲しみを、まさに暗黒の闇に突き落とされたかのようなだったと、目に涙を潤ませながら語ってくれた友人の姿からも、ユーゴスラビア人のチトー大統領への敬愛の深さが察せられます。バッヂに示された名は、彼らの誇り得る父の名と言えましょう。

ユーゴスラビアとの関わり

日本人にとってユーゴスラビアは、遠い国々、東欧諸国の1つです。北はイタリア、オーストリア、ハンガリー、東にルーマニア、南はブルガリア、ギリシア、アルバニアの国々が、そして西にはアドリア海を挟んでイタリアが並んでいます。遙か昔、ロシア民謡の中で口ずさんでいた国々の名前、いずれも夢のような国々です。

さて、8年前、私が未だインドネシアに滞在し、病院で働いていた頃、この国と国交を持つ唯一の社会主義国ユーゴスラビアから、電気技師の団体が仕事でやって来ました。1家族と十数名の単身赴任者たちといった構成。宿舎を私たちが勤めていた病院から近い街に定め、現場へと通勤していました。熱帯の炎天下の現場仕事は、彼らにとっては苦業であったろうと思います。

彼らが、病院へもしばしば受診し、顔なじみになった頃、ちょうどイスラムの断食期間中だったのですが、焼肉パーティーへのお誘いがありまし



た。同行者は、日本人電気技師のO氏夫妻でした。客は私たち3人、ホストは単身赴任者たち。1家族が参加していないのを不思議には思っていたのですが、別に尋ねもしませんでした。

今晚のメインディッシュは羊の丸焼きです。豚ではなく羊であったことに対しては、イスラム教徒の多いインドネシアでは羊がよく使われるので、原材料が手に入れやすかったのだろうというぐらいに思っていました。しかし、パーティーがたけなわとなるにつれて、彼ら全員がイスラム教徒であるということがわかってきました。雲をつくような大男ばかりで、彼らの言わゆる欧米人の顔つきと行動から、勝手に彼らがクリスチャンに違いないと決めてかかったのは浅はかなことでした。O氏はそのことをご存知でした。私は、そこで初めて今晚の羊のメニューの意味がわかったのです。

彼らがイスラム教徒であることは地理的条件からも十分理解できました。話の接ぎ穂に、先ほど気になっていた1家族の不在のことを尋ねてみたところ、あっけなく「彼らはカソリックだから」と答えただけ。これも意外でした。宗教が違えば種族も異なるという意識の隔たりが、他民族には理解を越える壁であることを如実に思い知らされました。

O氏によれば彼らのイスラム教は誠に柔軟性に富んでいるとのこと。例えば、仕事中でも暑ければビールを飲みながら鉄塔にも登るし、中華飯店にも入ります。極めつけは、「断食なんぞしてられない」というイスラム原理主義者が聞いたら極

刑間違いないしの行為を平気でしていることです。幸い寛大なインドネシア人たちは、外国人のやることに咎めだてはしません。イスラム教にもさまざまな党派があることを認めているからです。

さて宴酣になるにつけ、彼らが、陽気ででありながら、少し照れ屋で素朴な一面と激しい愛国心とを保ちつづけていることに気づきました。そのうち、誰かが1冊の部厚い本を抱えて現れました。それは、ユーゴスラビアの自然を写した写真集でした。樹や草や山々が緑に染まる夏。冬はスキー場に早変わり。アドリア海は美しいリゾート地です。「サラエボを知ってる？ 冬季オリンピックが開かれたところだ」「よく知っています」「あそこは僕たちの故郷なんだ。とても美しいところだからぜひ来て欲しい。その時は僕たちがどこへでも案内するよ」と力を込めて言います。頁をめくると、皆の口から祖国の美しさを讃える言葉が聞かれます。彼らの祖国への慕情も重った愛国心がひしひしと伝わってきました。

夜も更けて宴も果てようとする頃、年長のS氏が私たち3人に記念としてくださったのが、あのバッヂです。「僕たちがいかにチトーを尊敬し、祖国を大切に思っているかを、貴方たちにわかって欲しいのです」という言葉は、今も鮮やかに甦ってきます。それと同時に、未だに続くユーゴスラビアの戦渦の中で、美しい自然を誇りにしていたあの素朴な友人たちが、どのような思いで過ごしているだろうか、果して生きておられるであろうかと、訪ねることを夢みた彼の国のことに思いを馳せ、人間の浅はかさと罪の深さを思うこの頃です。